

シミリとメタファーの境界

—シミリを導入する表現の分類に関する一考察—

鍋島 弘治朗 (関西大学)

中野 阿佐子 (関西大学大学院)

要旨

メタファーとシミリの違いは、メタファー研究において古くから重要な課題であるが (Aristotle, 1954)、近年、認知言語学の分野で、英語に関して、シミリを特定する表現が *as* や *like* に限らず多岐にわたることを示す研究が相次いでいる (Goatly 1997, Cameron and Deignan 2003, Israel et al. 2004)。一方、日本語において、このような表現が「ような」や「みたいだ」に止まらないことは旧来から指摘されている (中村 1977, 山梨 1988)。本稿では、メタファーの存在を示すこのような表現をメタファー明示表現と呼び、その種類を列挙する。さらに、新たに比喩化フレームという概念を導入することによって多岐にわたるメタファー明示表現が体系的に理解可能であることを示す。

1 はじめに

「ような」「みたいな」に代表される表現を含む文は従来シミリ(直喩)と呼ばれ、そのような表現を含まないメタファー(隠喩)と区別されてきた。一方、「ような」「みたいな」など、比喩であることを明らかにする表現は非常に多岐にわたることが、日本語、英語の研究において報告されている(中村 1977, 山梨 1988, Goatly 1997, Cameron and Deignan 2003, Israel et al. 2004)。これらの表現については *Metaphorical Markers* (Goatly 1997)、*Metaphor Flags* (Steen et al. 2010)、直喩指標 (中村 1977) 等の名称で指摘されているが、本稿では、鍋島 (2016) にならって「メタファー明示表現」と呼ぶこととする。

2 節では日英の先行研究を紹介し、メタファー明示表現の多様性を示す。3 節では比喩表現の生成・理解に利用されると考えられる概略的な比喩過程の表現を「比喩化フレーム」と命名し、多岐にわたるメタファー明示表現の体系を新たに提案する。本稿で行うメタファー明示表現のリストと分類は、従来から興味を惹いてきたシミリとメタファーの関係に関して、両者がはっきりと区別できるものではなく、むしろ連続的な関係にあり、実質的には区別することが難しいという方向性を示唆することとなる。

2 先行研究

本節では過去の研究から、メタファー明示表現の多様性について記述する。2.1 では日本語の研究として中村 (1977)、山梨 (1988) を取り上げ、2.2 では英語の研究として Goatly (1997)、Cameron and Deignan (2003), Israel et al. (2004) を紹介する。2.3 では先行研究の問題点を指摘し、

日英語の分類の対応関係に関して考察する。2.4 はまとめである。

2.1 日本語におけるメタファー明示表現の先行研究

日本語のメタファー明示表現については、中村 (1977) がその多様性を指摘し、<類似>、<同一>、<比較>、<混同>、<連想>、<強意>、<限定>の7種類に分類している。(1)はその分類と用例である。

- (1) a. <類似> ゾウ {のように/みたいに/のごとく/に似た/にそっくりの/さながらの} 太い足
b. <同一> ゾウ {と同じ/同様の/同然の/と等しい/と違わない/と異ならない/変わらない} 太い足
c. <比較> ゾウ {に近い/に負けない/にひけをとらぬ/に劣らない/に優るとも劣らぬ/に優る/にたとえられる/と比べられる/に匹敵する/と甲乙つけがたい/とどっこいどっこの/をしのぐ/以上に/顔まけの/も驚く/も及ばぬ/もかなわぬ/の比でない/そっちのけの/より/ほど} 太い足
d. <混同> ゾウ {かと思う/にも思われる/かと疑う/とも疑われる/にも見える/にも見られる/にも紛う/と見ちがえる/と見まちがえる/と見あやまる} 太い足
e. <連想> ゾウ {を考えさせる/を思わせる/をしのばせる/を思い出させる/を思いおこさせる/を想起させる/を髣髴させる/を想像させる/を連想させる/を見る思いがする/を見る感じがする/を見る心地がする/の印象を与える} 太い足
f. <強意> 太い足は {まるで/全く/どう見ても/どこから見ても/まさに/まさしく/もはや/もう/すでに/まるっきり/ほんとうの/りっぱな} ゾウだ。太い足はゾウ {そのものだ/としか言いようがない}
g. <限定>太い足は {いわば/言ってみるなら/たとえて言うと/例をとれば/一種の/ある種の} ゾウだ。太い足はゾウ {なみ/クラス/級の} だ

(中村 1977:111ff)

山梨(1988)でも「のように」「みたいな」「如く」「…程の～」「さしずめ」「という」「まるで」「あたかも」「…と同じ」「…も同然」「ほとんど…だ」「…そのものだ」「…じゃあるまいし」「…と変わりはない」「…と違いはない」という多数の表現が喩えていることを示す役割を担うことが指摘されている(山梨 1988:36-39)。山梨 (1998) の表現群を鍋島 (2016) がまとめ、分類したものが(2)である。

(2) メタファー明示表現の分類

- | | |
|---------------------------|-----------------|
| a. のような、みたいに、如く、さしずめ、のように | <類似> |
| b. と同じ、そのものだ、も同然 | <同一> |
| c. じゃあるまいし | <同一性の否定> (<相違>) |
| d. という、なんて | <引用> |

- e. まるで、あたかも <仮想>
 f. と違わない、とかわらない <相違の否定> (中村では同一)
 g. ほとんど (類似の) <程度>

(鍋島 2016:257)

/

ここから日本語に関して、中村の7分類に加えて、<相違> や <程度> を表す表現、(2d) のような <引用> を示す表現、(2e) のような <仮想> を示す表現群もメタファー明示表現になることが示唆される。次節では英語の先行研究を検討する。

2.2 英語研究

英語では、Goatly (1997) がメタファー標識(metaphorical markers)という名称で同様の表現を20のグループに分類している。これらは、1. <明示標識>、2. <強意>、3. <限定>、4. <意味的メタ言語>、5. <模倣物>、6. <記号>、7. <上位語>、8. <コピュラを使ったシミリ>、9. <精緻化などの比較>、10. <節のシミリ>、11. <知覚動詞>、12. <誤認>、13. <認識動詞>、14. <言語動詞>、15. <so to speak>、16. <表記法>、17. <助動詞+言語動詞>、18. <モーダル>、19. <条件節>、20. <as it were>である。

メタファー明示表現の分類	メタファー明示表現
1. Explicit Markers	<i>metaphor/-ically, figurative/-ly, trope</i>
2. Intensifiers	<i>literally, really, actually, in fact, simply, fairly, just, absolutely, fully, completely, quite, thoroughly, utterly, veritable, regular</i>
3. Hedges or Downtoners	<i>in a/one way, a bit of, half-..., practically, almost, not exactly, not so much X as Y..., ... if not ...</i>
4. Semantic Metalanguage	<i>in both/ more than one sense/s, mean(-ing), import</i>
5. Mimetic Terms	<i>image, likeness, picture, parody, version, caricature, model, plan, effigy, imitation, artificial, mock</i>
6. Symbolism Terms	<i>symbol(-ic/-ically), sign, type, token, instance, example</i>
7. Superordinate Terms	<i>(some) (curious, strange, odd, peculiar, special) sort of, kind of</i>
8. Copular similes	<i>like, as</i>
9. Precision Similes and other comparisons	Material Verb + <i>like X, the Y of a X, Y's X</i> ; Noun-Adj.
10. Clausal Similes	<i>as if, as though</i>
11. Perceptual Processes	<i>seemed, sounded, looked, felt, tasted, + like/ as though/ as if</i>
12. Misperception Terms	<i>delusion, illusion, hallucination, mirage, phantom, fantasy, unreal</i>
13. Cognitive Processes	<i>believe, think, regard, unbelievable, incredible</i>
14. Verbal Processes	<i>say, call, refer to, swear</i>

15. <i>so to speak</i>	
16. Orthography	" " ! white space
17. Modals + Verbal Processes	<i>could say, might say</i>
18. Modals	<i>must, certainly, surely, would probable/-ly, may, might, could, possible/-ly, perhaps, impossible/-bility</i>
19. Conditionals	<i>if... could, would, might; imagine, suppose</i>
20. <i>as it were</i>	

表 1. メタファー標識の分類 (Goatly 1997:174-175)

Cameron and Deignan (2003) では教室での教員と生徒のやり取りを分析し、*actually, almost, imagine, just, kind of, a little, really, sort of, like, so to speak, literally, if you like, in a way, as it were* という 14 の表現を同調装置 (tuning devices) という名称でメタファーに注目させる表現として挙げている (Cameron and Deignan. 2003:149-160)。なお、*a little* と *if you like* を除く 12 の表現はすでに Goatly (1997) で分類されている。

さらに Israel et al. (2004) は、*equivalent of* や *no more ~ than...* のような比較表現に加え、*think of ~ as* や *view ~ as* などの<認識>を示す動詞もメタファー明示表現になることを示している。

(3) a. 'You think of a womb as a kind of place for transients, but it's a whole other life in there.' (John Updike)

b. 'And my husband and I basically view skiing as an invitation to suicide.' (Natalie Wexler in the *Washington Post*, 9/22/02)

(Israel et al. 2004: 125)

以上より英語においても *like, as* といった表現にとどまらない、実に多様なメタファー明示表現の存在が確認できる。

メタファー明示表現の多様性に関連し、メタファー性には段階があることを Glucksberg (2001) が指摘している。

(4) a. Cigarettes are literally time bombs. (煙草は文字通り時限爆弾だ)

b. Cigarettes are time bombs. (煙草は時限爆弾だ)

c. Cigarettes are virtually time bombs. (煙草は実質的には時限爆弾だ)

d. Cigarettes are like time bombs. (煙草は時限爆弾のようだ)

e. In certain respects, cigarettes are like time bombs. (ある意味で、煙草は時限爆弾のようだ)

f. Cigarettes are deadly, like time bombs. (煙草は命取りで時限爆弾のようだ)

g. Cigarettes are as time as bombs. (煙草は時限爆弾と同じくらい命取りだ)

(Glucksberg 2001: 46-47, 鍋島 2016: 258)

用例(4)はメタファー明示表現にあたる表現が含まれるが、(4a)から(4g)へと進むにつれて、メタファーらしさがなくなることが指摘されている。ここでは、(4b)がシミリではなく通常メタファーと呼ばれるものであることに注目すると、メタファーとシミリが連続性のあるカテゴリーであることが伺える(注1)。

2.3 先行研究の問題点

Sznajder et al. (2005) が正しく指摘するように、Goatly (1997) の分類には意味的なものと統語的なものが混在している。例えば、8. <コンピュータを使ったシミリ>、10. <節のシミリ>、17. <助動詞+言語動詞>、18. <助動詞>、19. <条件節>などは統語に関わる分類である。また、15. <so to speak>、20. <as it were>は、1つの表現が単独の分類を構成しており、拡張性に乏しい。

一方、意味をもとに分類した中村 (1977) の研究も万全ではなく、{に近い/に負けない/にひけをとらぬ/に劣らない/より/ほど}を含む比較の項目には雑多な内容が含まれている印象をぬぐえない。例えば、「に近い」には空間を元フレームとする<類似は近接>メタファーが関わっていると解され、「に劣らない」「に負けない」「にひけをとらぬ」にはそれぞれ <相違は優劣>、<比較は戦い> というような異なる概念メタファーが存在するように思われる。

<限定> に分類される「いわば」は「言語化してみると」と言い換えることができるが、どういった意味合いで <限定> なのかは不明確である。同様に「なみ/級の」は幅を示すが、<限定> に分類される根拠が不明瞭である。

<強意> 「まるで」は <同一> に分類される「同然」と意味が似ている。さらに、鍋島 (2016) では、(2e) に示したように <仮想> に分類している。(5) に示すように「まるで」はリテラルな類似性を示しにくいからだ。

(5) a. トラは猫みたいだ

b. ? トラはまるで猫だ

ここまで紹介してきた日本語と英語の研究は、それぞれ独立した研究であるが、両者(たとえば、中村 1977 と Goatly 1997) の間には類似も多い。Goatly (1997) の 2. <強意>、3. <限定> などでは中村 (1977) と合致している。また、9. <精緻化などの比較> は、<比較> と重なっており、11. <知覚動詞>、12. <誤認>、13. <認識動詞> などは、中村(1977)の <混同>、<連想> と近い。両者に重なりが多いことは、メタファー明示表現とその分類という研究方向に信ぴょう性が高いことを示すひとつの証左となっているともいえよう。

2.4 まとめ

ここでは日英語におけるメタファー明示表現の多様性と、その対応関係について触れた。日本語においても英語においても多様な用例が示される一方、その分類には問題があることがわかる。次節では、中村 (1977) による意味に基づいた分類を継承しつつ、比喩化の一連のプロセスをそれぞれのパラメータとする比喩化フレームを提案する。

3 比喩化フレーム

本節では、「比喩化」という「異なる事物の比較」フレームを概略的に示し、比喩形成の過程をフレームとして整理する。比喩化フレームには、<比較> <同一> <類似> <相違> <範疇化> <程度> <認識> <仮想> <言語化> <比喩化> の10のパラメータを想定する。

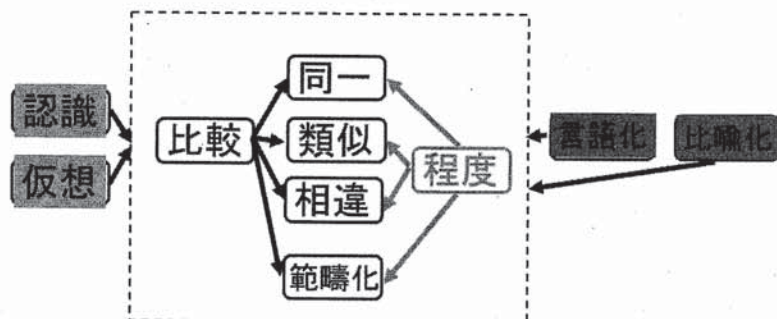


図1. 比喩化フレーム

3.1 比喩化フレームのパラメータ

まず、メタファーやシミリを「種類の異なる事物を比較すること」と定義する。「比較」という用語は「領域間の写像」という認知言語学のメタファーの定義 (Lakoff and Johnson 1980 など) からやや異なるが、写像という対応付けを行う前提のプロセスとして一般に想定される手続きである。なお心理学では「比較理論」が2大理論のひとつである (Bowdle and Gentner 2005)。また Pragglejaz Group (2007) の提示する MIP (metaphorical identification procedure) においても comparison という言葉が使用されることから、メタファーの認知過程において、<比較> を1つの認識のパラメータとしてとらえることは妥当といえる。

<比較> には「比べれば」「比較すると」「comparing」「comparable」など、比較行為自体を明示的に限定するメタファー明示表現を入れる。<同一>、<類似>、<差異> は <比較> を行った結果判明する。それらを <同一> <類似> <相違> のパラメータとして区別する。これら3つのパラメータは (6) に示すように、空間のフレームによって構造化されている空間の理論を使って一律に取り扱うことが可能である。

- | | |
|------------------------|-----------|
| (6) a. お母さんと <u>一緒</u> | <同一>は同地点> |
| b. クロアゲハに <u>近い</u> | <類似>は近接> |
| c. 事実から <u>かけ離れている</u> | <相違>は距離> |

(6a) は <同一> 表現「一緒」を用いることで、「母親」と典型的には「その子ども」という2者を比べていることを示す例である。(6b) は「近い」という <類似> を明示する表現により、異なる2つの事物が比較されていることを示している。最後に(6c) <相違> では、「かけ離れている」のように、<距離> の遠さが異なっていることを表現している。(7) は<相違> がメタファーを導入することを示している。

- (7) a. 猫や犬じゃあるまいし、その辺に捨ててくるというわけにもいかない。
 b. ボキャブラリー学習は、筋トレと同じだ／だいぶん違う
 c. Love is not a game.

(7a)は<相違>「じゃあるまいし」が<動物>と<人>の異なる事物の比較を暗示する。
 (7b)は「同じ」<同一>、「違う」<相違>を用いた表現であるが、これらが「ボキャブラリー学習」と「筋トレ」という2つの異なる概念の対応づけ、すなわちメタファーを示している。英語でも同様、(7c)のように<相違>表現がメタファー明示表現として用いられうる。

次に<範疇化>というパラメータを考える。範疇化は Glucksberg et al. (1993) のカテゴリー包含説 (Categorization theory) に示されるように、メタファーを考える上で重要な役割を担っていることから、1つの独立したパラメータとする。ここには「一種の」「ある種の」「a kind of」「instance」などのメタファー明示表現が想定される。また、<比較>の後に<範疇化>するという時系列の関係は、先の<同一><類似><差異>の判断の際の時系列の関係と同等である。対象を下位カテゴリーと認定する<範疇化>（「一種の」「ある種の」）も<同一>や<類似>の類例と考えられることから、図1では同じ並びに記述した。

類似の<程度>を示す表現は、「ぴったり」「かなり」「まあ」「そこそこ」「なくはない」「exactly」「quite」「almost」など多様である。なお「強意（「まさに」）」「限定（「～並み」）」はこの<程度>の下位区分と考えることができる。(8)は<程度>が<同一><類似><相違><範疇化>に対して、関わりをもつことを示している。

- (8) a. 彼女と彼女の母親の声はまったく瓜二つだ。<同一>
 b. In some ways your brain is quite similar to your muscles. <類似>
 (脳は筋肉にかなり似ているところがあります)
 c. 理想と現実は相当異なる <相違>
 d. exactly the type of thing a politician would say (英辞郎) <範疇化>
 (いかにも政治家が言いそうなこと)

(8a)は「まったく」<程度>が「同じ」<同一>と同等の意味を表す「瓜二つ」と関わる例である。(8b)は<類似>に quite という<程度>の表現が共起する。(8c)は<相違>の<程度>がはなはだしいことが「相当」という語から理解できる。(8d)は「政治家の発言」という範疇において、その「らしさ」<程度>が関係することを表している。図1における<程度>からの矢印(→)は、このように、それぞれのパラメータに類似の<程度>が関わりをもつことを明記したものである。

ここまで<比較>を前提とした比喻化フレームの因果的体系について6つのパラメータを考察してきた。ここからは、それらとは少し層の異なる比喻化フレームのパラメータを取り扱う。

まずは <認識> と <仮想> の2つである。<比較> 前提とするメタファー形成はそもそも認識の問題である。したがって「まるで」「想像させる」“seems” “imagine” などのように <認識> のものを明示することもできる。さらにメタファーやシミリはリテラルな比較と異なり、違いの存在を前提としているので、この比較が実際の意味ではないという仮想性が存在する。これを <仮想> とした。ここには条件節（「たとえば」）や仮定法（「まるで」“as if”）も含める。

さらに「と言える」や「いわば」といった表現のように、<比較> を <言語化> することも可能である。加えて、「喩える」「なぞらえる」「見立てる」など、比喩として表現することもできる。これを <比喩化> とする。比喩であることを明示することで比喩を導入することができることは、Goatly (1997) でもすでに figuratively, metaphorically などの表現によって示唆されている。

3.2 まとめ

以上、本節では比喩に関わる一連のプロセスについて10のパラメータを想定した「比喩化フレーム」を提案した。それは、2つの事物を比べる<比較>を前提とした<同一><類似><相違><範疇化><程度>という6つのパラメータに加え、比喩であることを認識できる能力、言語化できる能力という異なる層に対し、<認識><仮想>、<言語化><比喩化>という4つのパラメータを想定した、比喩の形成過程に関わるフレームである。

表2は比喩化フレームのパラメータと、それぞれにあてはまる日本語と英語のメタファー明示表現の対応表である。なお異なる大分類は色分けで示した。次節では、パラメータを想定することの利点について考察する。

パラメータ	日本語	英語
<比較>	比べられる, 比較して…	<i>compare, comparison, comparable to...</i>
<類似>	ように, みたいに, 近い, に劣らない…	<i>like, as, similar to, imitation, parody...</i>
<同一>	と同じ, と変わらない, と違わない, そのもの…	<i>as~as, the same as...</i>
<差異>	と違う, と異なる, ~より, 以上の, もしのぐ…	<i>than~, not the same as...</i>
<範疇化>	一種の, ある種の…	<i>type, a kind of, instance, example...</i>
<程度>	まさに, もはや, ほとんど~だ, ~並み…	<i>literally, really, in fact, almost, possibly, a little...</i>
<認識>	思える, 想像させる, 連想させる, どう見ても…	<i>seems, sounded, imagine, suppose...</i>
<仮想>	まるで, あたかも, と誤る…	<i>as if, as though, as it were, delusion, illusion...</i>
<言語化>	いわね, といふ, といえる, なんと, いわゆる	<i>say, call, in both sense, so to speak,</i>

		<i>symbolically...</i>
<比喩化>	譬える、なぞらえる、見立てる	<i>metaphorically, figuratively, trope...</i>

表2. 比喩化フレームと日英語表現の対照

4 考察

3 節では比喩化フレームを導入し、日本語、英語においてそれぞれのパラメータに対応するメタファー明示表現が存在することを示した。本節では、従来の分類では取り扱いが難しかったケースを取り上げ、比喩化フレームを用いることでそれらの問題が解消されることを示す。

第1に、比喩化フレームにおいては、Goatly (1997) で単独のグループを形成していた 15. <so to speak>、20. <as it were> は、それぞれ <言語化> と <仮想> にあたり (表2 参照)、より洗練された形で統一的に把握することが可能である。

第2に、1つの語が複数の解釈が可能なケースは従来の区分では分類が難しく、時には判断が揺れるケースであった。今回の提案は分類ではなく、パラメータのため、複数のパラメータを持つことが可能になり、分類にまつわる問題が解消する。

(9) a. 見誤る / *misjudge* (誤認)

b. どう見ても (中村 1977: 111ff)

例えば (9a) は「見」という表現が入っていることから、「見る」すなわち、<認識> の表現と考えられる一方、「誤る」という表現からそれが事実でない、すなわち <仮想> の表現ともとらえられる。また (9b) 「どう見ても」は中村 (1977) では <強意> に分類されている用例だが、<程度>、<同一>、<認識> の3つの要素を兼ね備えている。このように、従来の分類という方法では、複数の判定の可能性を持つ表現の配置が問題となり、また判定者によって判断が異なりうることも容易に想像がつく。しかし比喩化フレームは、喩えであることを示す過程を体系的にとらえるものであり、例えば <認識> と <仮想> という、複数のパラメータが同時に立ち上がることは問題とはならない。それらは比喩過程における複数の側面を反映したメタファー明示表現であると判断されるのみである。

第3に、比喩化のフレームでは、従来具体的に述べられてこなかった、複合的なメタファー表現に関しても問題なく取り扱うことが可能である。

(10) a. 例えて 言う ならば

b. まるで絵にかいたような風景

c. Pretty nearly true desert (かなり本当の砂漠に近い) (Goatly 1997:187)

(10a) は複合的なメタファー明示表現の例である。比喩化フレームにおいては、この表現は <比喩化> <言語化> <仮想> の3つの側面をとらえたメタファー明示表現であると判断できる。

(10b) は文中に複数の明示表現が共起する例である。この場合「まるで」は <仮想>、「ような」は <類似> と判断できる。(10c) のように英語においても同様に機能する。

関連して、比喻過程の複数の側面をとらえることが許容される比喻化フレームのもうひとつの利点は、分類の場合のように必要以上に詳細な区分を増やす必要がないことである。(11) は Goatly (1997) からの用例 (の一部) と分類である。

- (11) a. *say* <Verbal Processes>
 b. *could say* <Modal + Verbal Processes>

Goatly (1997: 174-175) では“*say*”と“*could say*”を別の分類としている。一方比喻化フレームを用いれば(11b)の用例は <仮想>と <言語化> を示すメタファー明示表現となり、新たに異なる区分を設定する必要はない。

ここでは比喻化フレーム導入によって、従来の区分では取り扱いにくかったメタファー明示表現も取り扱うことができ、かつより体系的に理解可能であることを示した。

5 まとめ

本稿では日英語のメタファー明示表現に関する研究を取り扱い、メタファー明示表現が多岐にわたることを示した。これらがそれぞれメタファーらしさの度合いを示すことは、従来から検討されてきたメタファーとシミリの区分がそれほど明確に二分されるものではないことを示唆する。また先行研究の分類が不十分であることを指摘し、比喻化という「異なる事物の比較」のフレームを導入することによって多様な表現を体系的に取り扱えることを示した。さらに比喻化フレームで想定するパラメータでは、複数の側面が同時に関わることを問題としないため、従来の分類では説明しきれなかった表現に関しても、容易に取り扱うことができることを主張した。

注 1 なおメタファーとシミリを区別しない詳細な根拠に関しては、鍋島 (2016) の 10 章を参照。

注 2 http://www.metaphorik.de/sites/www.metaphorik.de/files/journal-pdf/09_2005_skorczynskapique.pdf

最終検索日: 2016 年 2 月 28 日

参考文献

- Aristotle. *Rhetoric* (1954). Trans. W. R. Roberts. New York: Modern Library.
Bowdle, B., and Gentner, D. (2005). The career of metaphor. *Psychological Review*, 112, 193–216.
Cameron, L. (2003). *Metaphor in Educational Discourse*. Continuum London New York, London and New York.
Cameron, L. (2011). *Metaphor and Reconciliation: The Discourse Dynamics of Empathy in Post-conflict Conversations*. Routledge, New York.
Cameron, L. and A. Deignan (2003). Combining large and small corpora to investigate tuning devices

- around metaphor in spoken discourse. *Metaphor and Symbol*, 18(3), 149-160.
- Gentner, D. (1983). Structure-mapping: A theoretical framework for analogy. *Cognitive Science*, 7, 155-170.
- Glucksberg, S. (2001). *Understanding Figurative Language: From Metaphors to Idioms*. Oxford University Press, Oxford.
- Glucksberg, S. and B. Keysar (1990). Understanding metaphorical comparisons: Beyond similarity. *Psychological Review*, 97, 3-18.
- Glucksberg, S. and B. Keysar (1993). How metaphors work. In Ortony, A. (ed.), *Metaphor and Thought*, 401-424. Cambridge University Press, Cambridge and New York.
- Goatly, A. (1997). *The Language of Metaphors*. Routledge, New York.
- Grady, J. (1997). Foundations of meaning: Primary Metaphors and Primary Scenes. PhD dissertation, University of California, Berkeley.
- Israel, M. J., R. Harding, and V. Tobin (2004). On simile. In Achard, M. and S. Kemmer (eds.), *Language, Culture, and Mind*, 123-135. CSLI Publications, Stanford.
- Lakoff, G. (1993). The contemporary theory of metaphor. In Ortony, A. (ed.), *Metaphor and Thought*, 202-251. Cambridge University Press, Cambridge and New York.
- Lakoff, G. and M. Johnson (1980). *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press.
- 鍋島弘治朗 (2016). 『メタファーと身体性』. ひつじ書房, 東京.
- 中村明 (1977). 『比喩表現の理論と分類』. (国立国語研究所報告 57) 秀英出版, 東京.
- Ortony, A. (1979). Beyond literal similarity. *Psychological Review*. 86(3), 161-180.
- Ortony, A. (1993). The role of similarity in similes and metaphors. In A. Ortony (ed.), *Metaphor and Thought*, 342-356. Cambridge University Press, Cambridge and New York.
- Pragglejaz Group. (2007). MIP: A method for identifying metaphorically used words in discourse. *Metaphor and Symbol* 22(1), 1-39.
- Semino, E. (2008). *Metaphor in Discourse*. Cambridge University Press, New York.
- Steen, G., A. G. Dorst, J. B. Herrmann, A. A. Kaal, T. Krennmayr and T. Pasma. (2010). *A Method for Linguistic Metaphor Identification from MIP to MIPVU*. John Benjamins, Amsterdam and Philadelphia.
- Sznajder, H. S., and J. Piqué-Angordans (2005). A corpus-based description of metaphorical marking patterns in scientific and popular business discourse. (European Research Conference on Mind, Language and Metaphor in Granada, Spain (April 2004) 口頭発表) (注2).
- 山梨正明 (1988). 『比喩と理解』. 東京大学出版会, 東京.

A boundary between simile and metaphor: A study on classification of expressions related to simile

KJ Nabeshima (Kansai University)

Asako Nakano (Graduate school of Kansai University)

Abstract

Although the difference between metaphor and simile has been an important issue since the time of Aristotle, it has not been clear which phrases other than *like* or *as* form simile. Recent studies show that there is a wide variety for such phrases in English (Goatly 1997, Cameron and Deignan 2003, Israel et al. 2004) and in Japanese (Nakamura 1977, Yamanashi 1988).

In this paper, we term these phrases Metaphor Markers and 1) compare studies on English Metaphor Flags and Japanese Metaphor Flags; 2) introduce a “metaphorization frame” which comprises of different cognitive and verbal actions as its parameters; 3) demonstrate that this metaphorization frame can give a notional and systematic understanding to what seem to be random lists of different types of Metaphor Flags.